

教育等に関するアンケート

報告書

2023

The Report of Learning Outcome Survey 2023



目的	本学の教育の状況についてデマンド・サイドの意見を把握することにより、教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図ることを目的とする。			
標本抽出および配布回収方法	卒業・修了年次の学生・院生に対する全数調査。 電子メールまたはQRコードを記した用紙の配布により調査URLを知らせ、Webアンケートフォームを通じて回答を収集。			
実施時期	令和6年1月～3月			
実施機関	総務委員会			
分析機関	教育等に関するアンケート分析専門部会（教務委員会設置）			
配布・回収数	区分	回答者数	対象者数	回収率
	全体	266	315	84.4%
	学士課程	99	110	90.0%
	修士課程	70	98	71.4%
	専門職学位課程	97	107	90.7%

目次	分析の総括	3
	分析結果	4
	分析結果の要約	4
	入学前の状況	5
	入学動機	6
	教育レベルに対する認識	7
	教育内容の理解	8
	必修とされる授業時間に対する認識	9
	教職実践力に関する科目の有用感	10
	ゼミ活動に対する満足度	11
	教育環境	12
	大学教員	13
	学生支援	14
	本学で学んだ成果：教育内容に対する理解	15
	本学で学んだ成果：汎用的資質	16
	本学で学んだ成果：教育資質	17
	教育の有用性に対する実感	18
	卒業後・修了後の進路予定	19
	自由記述	20
	参考データ	21
	自由記述【回答集計】（良いと思われること）	21
	自由記述【回答集計】（本学への希望・改善点）	24
	回答者の所属専修・コース名	28

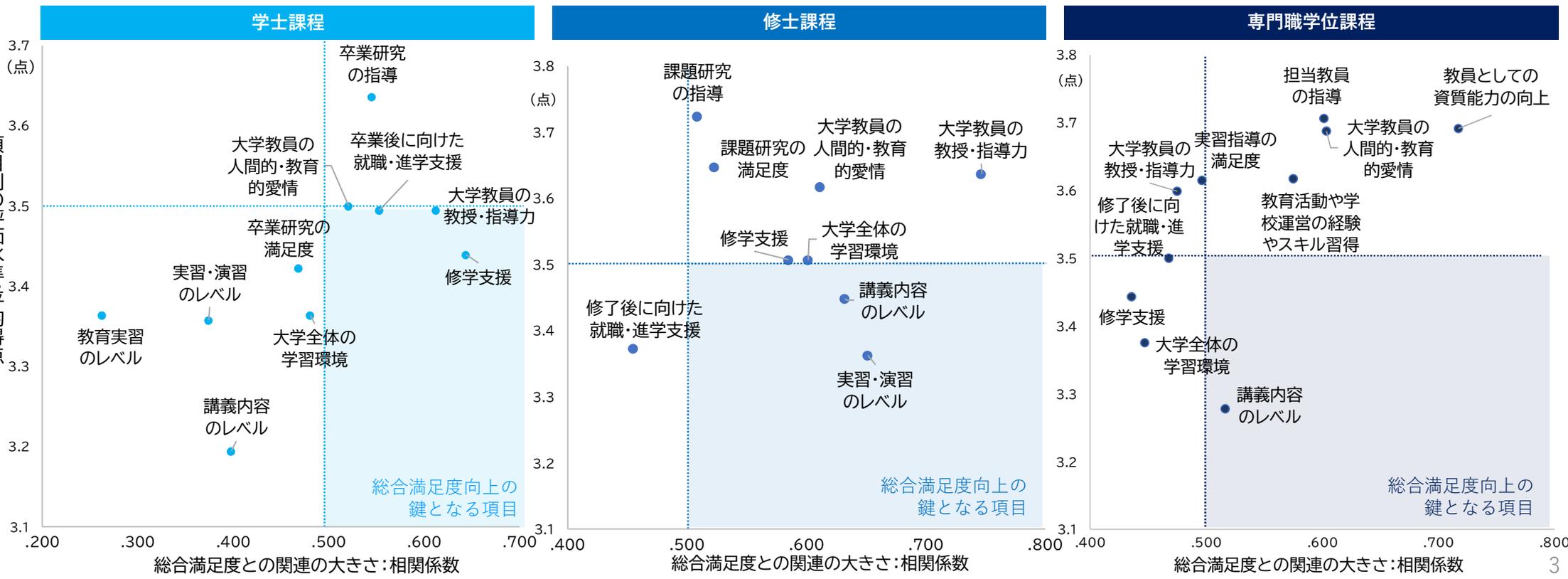
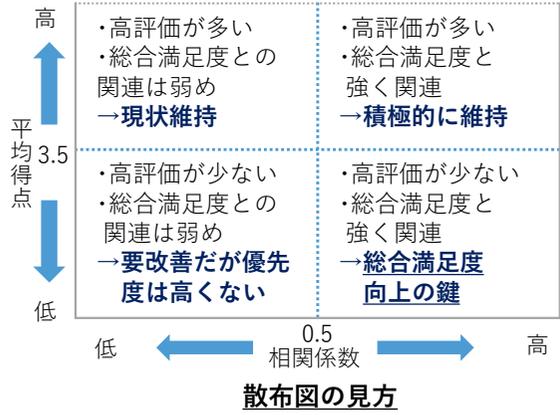
R5年度と過去4年間の回答を得点化して結果を比較したところ、ほとんどの項目で大学への評価や満足度の向上が確認された。低い評価が続いていた項目にも改善がみられた。回収率も高かったため、信頼性や妥当性も問題ない結果である。

調査した主な項目を、評価水準を縦軸、総合満足度*との関連の強さを横軸とした散布図で表すと、全課程で評価が最も高かったのは**研究指導**、次いで**大学教員の指導や愛情**についてであり、これらの項目は総合満足度との関連も大きいことが読み取れる。自由回答と合わせると、**少人数制による丁寧な教育、親切で熱心な指導、実習や就職の支援体制**などが高い評価につながったといえる。

総合満足度との関連が最も大きな項目は、学士課程は修学支援、修士課程は大学教員の教授・指導力、専門職学位課程は教員としての資質能力の向上に対する実感であった。**学士課程**では**修学支援**、**修士課程**では**実習・演習**及び**講義レベル**、**専門職学位課程**では**講義レベル**を改善することが、総合満足度をさらに向上する鍵となり得ることが示された。

大学全体の学習環境や施設に関する満足度も向上しつつあるが、自由回答にも多く記述されたように**食堂・売店**やコース別の**院生室**に対する不満が大きい。食堂・売店の改善は容易ではないものの、食事は生活の基盤であり、商店の少ない高島で暮らす学生にとって切実な問題であるため、さまざまな知恵を結集して対策を施すことが求められる。院生室に対する不満は、大学全体での学習スペース充実の効果も期待しつつ、レイアウト変更や什器更新などコース単位でも可能な対応を進めることが重要だろう。

*総合満足度はp15「教育に対する理解」とp18「有用性に対する実感」(学士と修士)or「教育に対する満足度」(専門職)との合計点。
 散布図の見方は右図および以下のとおりである。
 縦軸：項目別の評価水準を示した平均得点。3.5点を十分に高い水準の目安とした。
 横軸：各項目と総合満足度との相関係数。0.5以上の場合に関連が強いとした。



学士課程

「最も当てはまる入学動機」は「教員になること」が84%と近年で最も高く、卒業後の進路は「教員として就職」は78%と平年並みであるが、「本学大学院に進学」が12%と例年に比べて高かった。

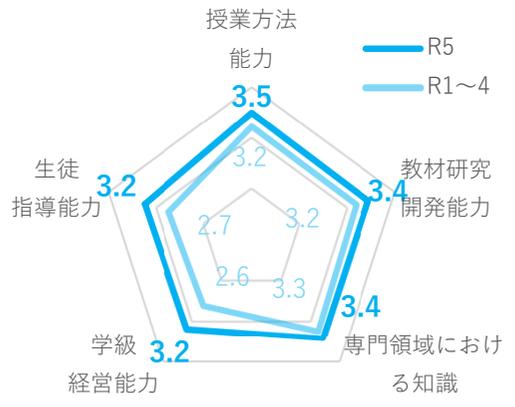
教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、全体として3.3点以上となった。特に**3.5点前後と高かったのは研究指導や大学教員**に対する評価、**就職・進学支援**に対する評価である。

教育成果に対しては「身に着いた資質」の「生徒指導能力」「学級経営能力」がR5年度はR1～4年度と比べて0.5点以上増し、教育内容に対しても「教職実践に関する授業の評価」が0.3点以上向上するなど、**教職実践力を向上させるための教育**の評価に**大幅な向上**がみられた。

学生は教員になるための教育や支援を求めており、教育内容や支援体制もそれらに応えることができているといえる。



本学で学んだことの成果：教育資質



修士課程

入学前の状況は「他大学の学部・研究生」が55%と過半数を占め、修了後の進路は「教員以外の職に就職」が52%と最多であった。「現職復帰」は5%ときわめて少なかった。

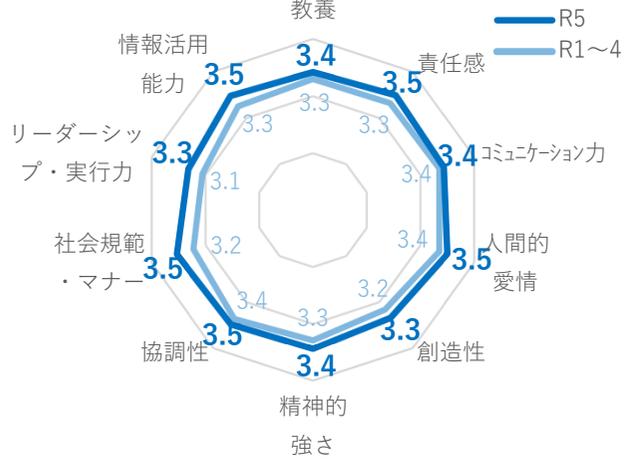
教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、概ね3.4点以上となった。学部と同様、特に**高かったのは研究指導や大学教員**に対する評価であり、**3.6点以上**を示した。

本学で学んだことの成果のうち汎用的資質の向上についてみると、10項目いずれもR5年度は過去4年間平均よりも向上していた。「社会に出て、本学の教育内容が役立つと思いますか」はR4年度よりも微減したものの3.5点と高かった。

修士課程で特徴的な結果は、7項目でたずねた**教育環境**に関する評価がいずれも**大幅に向上**している点である。教員以外の職に就職するケースが多い修了生にとっても、本学の教育が有用と受け止められていることがうかがえる。



本学で学んだことの成果：汎用的資質



専門職学位課程

「最も当てはまる入学動機」は「高度な教育実践能力を習得する」が近年徐々に増加し、R5年度は51%と半数超となった。対照的に「教育委員会の推薦」は減少を続け、R5年度はわずか5%であった。修了後の進路は「現職復帰」と「教員として就職」の合計が94%と大半を占めている。

教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、概ね3.3点以上となった。特に**研究指導や大学教員**に対する評価、そして**教職の資質や経験・スキル**の向上に関する**評価が高く、3.6～3.7点**を示した。

講義内容のレベルや分かりやすさは3.3～3.4点台となっており、相対的には評価が低い項目となった。

自由回答に熱心な記述が見られ、**教員による丁寧な指導や、各地の現職教員を含めた院生同士の学び合いの場**を提供できていることが、大きな満足度につながっていることがうかがえる。指摘された具体的な問題点に対応し、意欲の高い大学院生が集まる環境を維持することが重要であろう。



教員としての資質向上 学校の改善に資する経験・スキルの習得

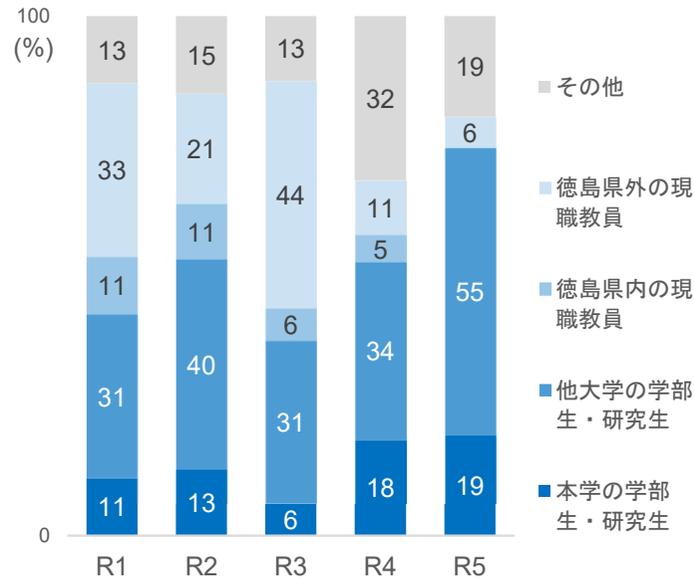


「入学前の状況を最も当てはまる事項を一つだけ教えてください。」に対し単一回答を求め、各年の結果を構成比で示した。

学士課程

該当する設問なし

修士課程



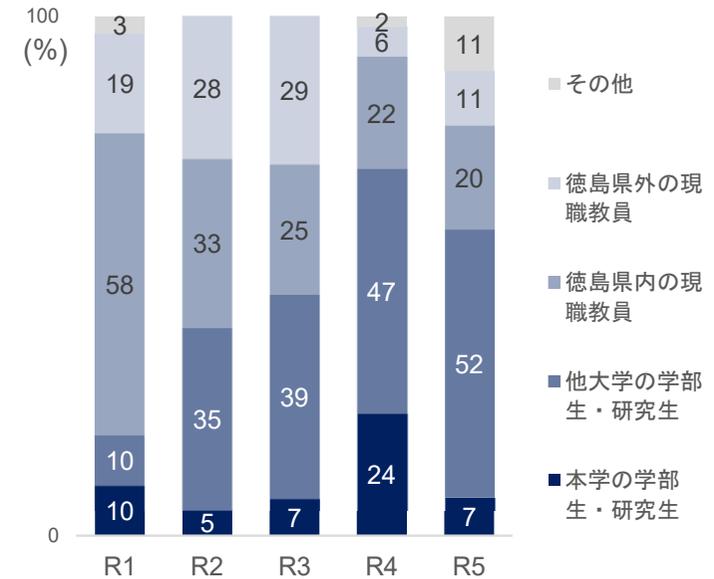
R5年度は、最も高いのは「**他大学の学部生・研究生**」(55%)であり、過去4年間は30~40%台であったものが更に増加していた。

「**本学の学部生・研究生**」は(19%)で、R4年度の18%とほぼ同様で、R3年度(13%)以前よりも増加している。

「**徳島県内の現職教員**」との回答は、R2年度までは10%台だったのが、R3年度以降は1桁台に減少し、R5年度には該当者なし(0%)となっていた。おそらく県内の現職教員は教職大学院に派遣される場合がほとんどであるためと思われる。

「**その他**」(19%)については、R4年度は32%と多かったがR1年度からR3年度までと同様の10%台に戻った。

専門職学位課程



「入学前の状況を最も当てはまる事項を一つだけ教えてください。」に対し単一回答を求め、各年の結果を構成比で示した。

「**他大学の学部生・研究生**」：R5年度は**52%**であり、R1(10%台)、R2(35%)、R3(39%)、R4(47%)と、年々増加傾向にある。

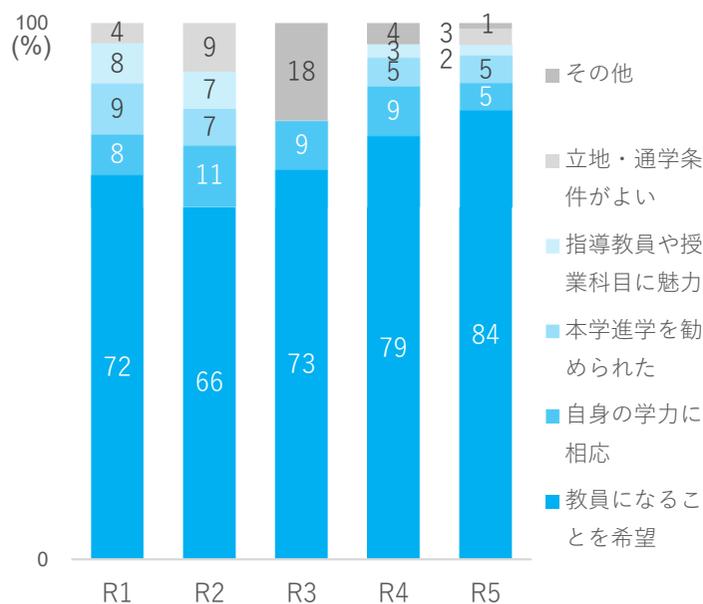
「**徳島県内の現職教員**」：R5年度は**20%**であり、R1(58%)、R2(33%)、R3(25%)、R4(22%)と年々減少している。

「**徳島県外の現職教員**」：R5年度は**11%**であり、R1(19%)、R2(28%)、R3(29%)からR4(6%)の間に激減したのが、R5年度はやや回復した。

近年は学卒生と現職教員の割合が変化し、R1~4年度の間に「**学部生・研究生**」(本学+他大学)を足した割合が、20%から71%へと増加し、「**現職教員**」(徳島県内+徳島県外)は77%から28%へと減少した。R5年度は「学部生・研究生」59%と多いものの、「その他」(一般企業勤務経験者)(11%)が増えるなど、これまでとは違う傾向もみられた。

「Q1. 入学動機は何ですか？最も当てはまる事項を一つだけ教えてください。」に対し単一回答を求め、各年の結果を構成比で示した。

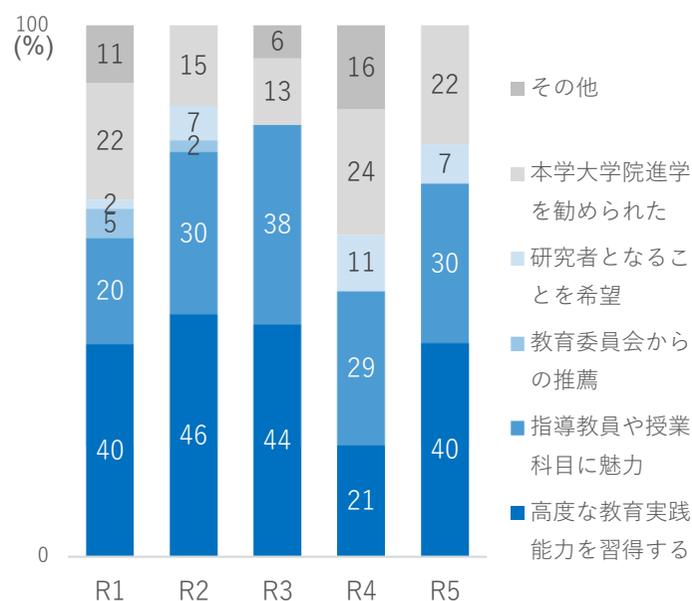
学士課程



学士課程の入学動機として、最も多いのは「**将来、教員になることを希望していたため**」(84%)であった。この回答については、R1年度が72%、R2年度が66%であり、以降、少しずつ増加を続けている。

これ以外の回答は非常に少なく、いずれの項目もR2年度以降、減少傾向にある。(R3年度は「その他」の回答割合が18%と高いが、回答者数が非常に少なかったため、例外的な結果といえる。)

修士課程

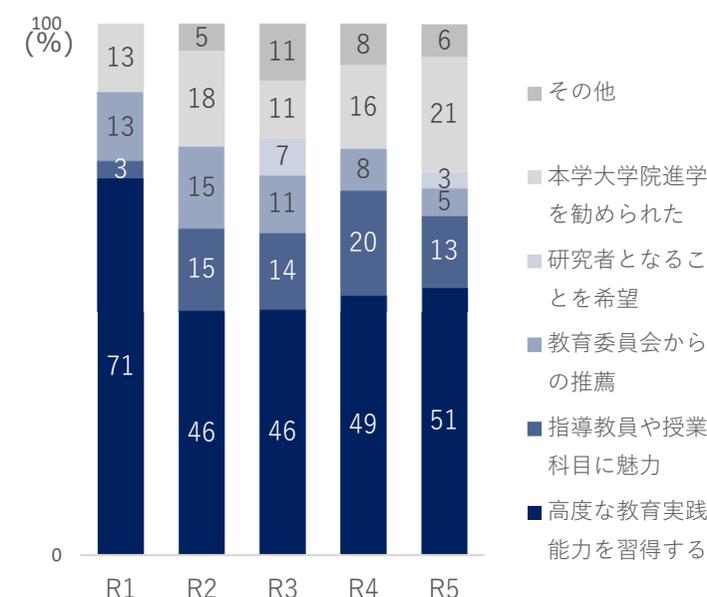


修士課程の入学動機として、最も多いのは「**高度な教育実践能力を習得するため**」(40%)であった。この回答については、R1年度からR3年度までの3年間では40%以上を占め最も多かったが、R4年度では21%で2位に落ちたものの、再び従来までの傾向に復した。

次いで「**本学指導教員や授業科目に魅力があったため**」(30%)が2番目に多く、R2年度からR5年度までの4年間で30%前後を占めていた。

「**本学大学院進学を勧められた**」(22%)はR1年度(20%)、R4年度(24%)とほぼ同等で、R2年度(15%)、R3年度(13%)では低下していたものが回復してきたといえる。なお「教育委員会からの推薦があったため」と回答した者はR3年度以降ではいなかった(0%)。

専門職学位課程



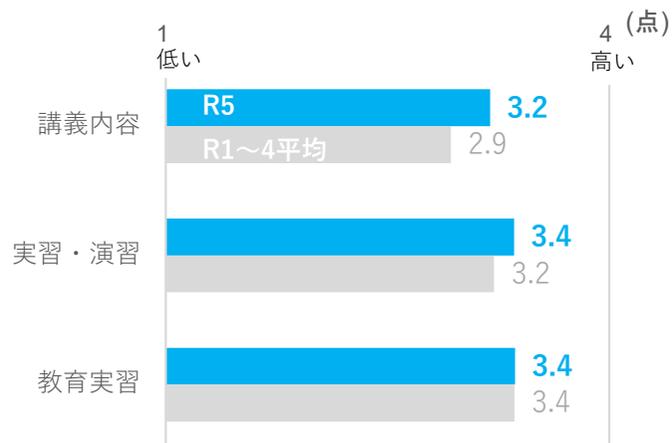
専門職学位課程の入学動機として最も多いのは、「**高度な教育実践能力を習得する**」(51%)であり、R2以降は半数程度の割合を示しながら徐々に増加している。

次いで多いのは「**本学大学院進学を勧められた**」(21%)であった。「教育委員会からの推薦」は13%であり、この4年間で最も少なかった。

「その他」に記述された内容は、「教員免許が取得できるから」「教員になるため」である。入学前の状況と合わせてみると、一般企業勤務者は教員免許の取得が動機となっており、常勤講師・臨時講師として勤めていた者は(正規の)教員になるという動機で入学したケースが多かった。

4件法での回答を求め、「高い」=4点、「どちらかといえば高い」=3点、「どちらかといえば低い」=2点、「低い」=1点として平均値を算出した。3点以上は、回答の大半が「高い」「どちらかといえば高い」であり、3.5点以上は「高い」が半数以上を占めていることを示す（以降、同様）。

学士課程



「講義の内容のレベル」：

R5年度の平均値は**3.2**点であった。R1~4年度の平均値は2.9点であったのに対し、0.3点の増加となった。これは「どちらかといえば高い」と「高い」という回答の合計が、2割程度増加したことを反映したものである。

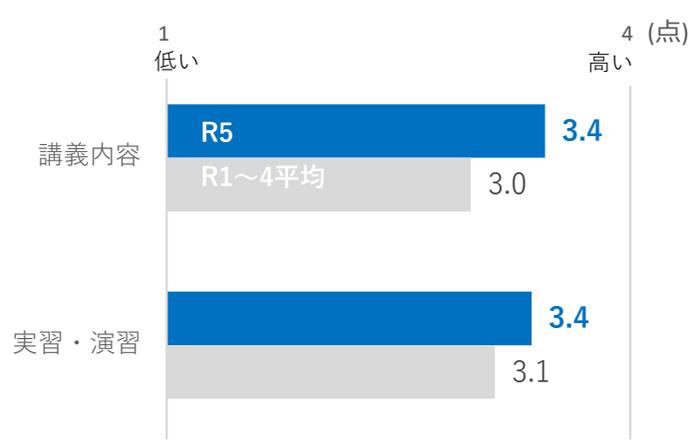
「実習・演習の内容のレベル」：

R1~4年度の平均値(3.2点)に比べ、R5年度は**3.4**点とやや増加した。「どちらかといえば高い」が増え、「どちらかといえば低い」の回答割合が減少していた。

「教育実習の内容のレベル」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.4点)と変化がなかった。

修士課程



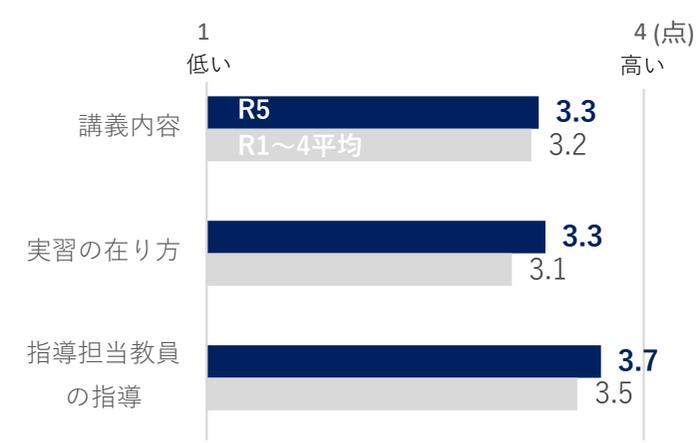
「講義内容レベル」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値である3.0点に比べ0.4点の上昇となった。「どちらかといえば高い」と「高い」という肯定的な回答割合の大幅な増加がみられた。

「実習・演習の内容のレベル」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値である3.1点と比べて0.3点の上昇であった。「どちらかといえば高い」と「高い」という肯定的な回答割合の増加がみられた。

専門職学位課程



「講義の内容のレベル」：

R5年度の平均値は**3.3**点であり、R1~4年度の平均値(3.2点)とほぼ同水準で推移している。

「実習の在り方」：

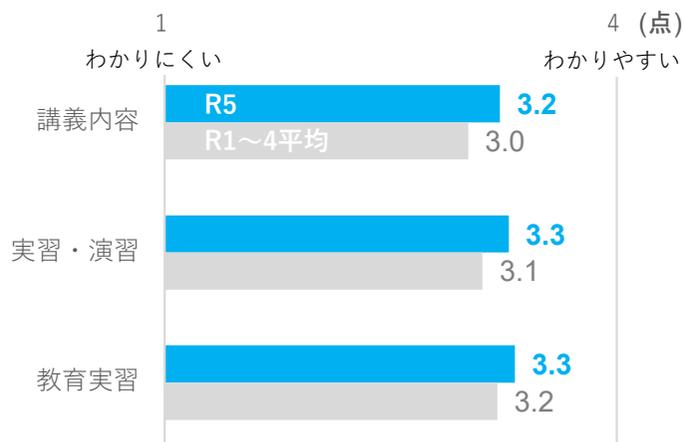
R5年度の平均値は**3.3**点となっており、R1~4年度の平均値(3.1点)に比べ、0.2点と若干の増加が見られる。

「大学院における指導担当教員の指導」：

R5年度の平均値は**3.7**点と高い値であった。R1~4年度の平均値も3.5点と高かったが、さらなる増加がみられた。

4件法での回答を求め、「わかりやすい」=4点、「どちらかといえばわかりやすい」=3点、「どちらかといえばわかりにくい」=2点、「わかりにくい」=1点として平均値を算出した。

学士課程



「講義の内容の理解」：

R5年度の平均値は**3.2**点であり、R1~4年度の平均値(3.0点)に比べると「どちらかといえばわかりやすい」と「わかりやすい」という肯定的な回答割合が微増した。

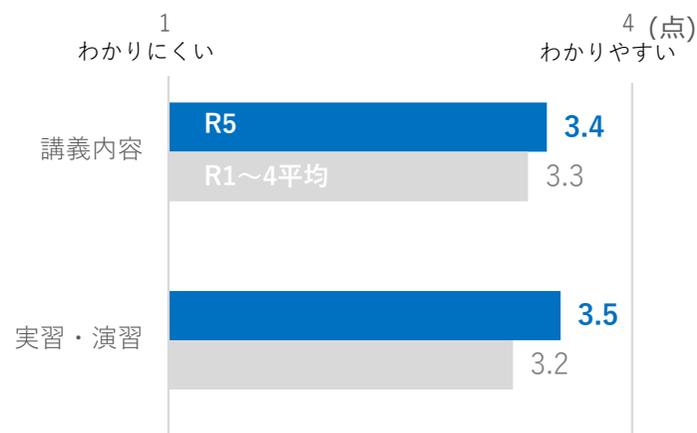
「実習・演習の内容の理解」：

R5年度の平均値は**3.3**点であり、R1~4年度の平均値(3.1点)より0.2点増加した。「どちらかといえばわかりやすい」と「わかりやすい」を合わせた肯定的な回答割合が微増した。

「教育実習の内容の理解」：

R5年度の平均値は**3.3**点であり、R1~4年度の平均値(3.2点)に比べ、「どちらかといえばわかりやすい」と「わかりやすい」を合わせた肯定的な回答割合がわずかに増した。

修士課程



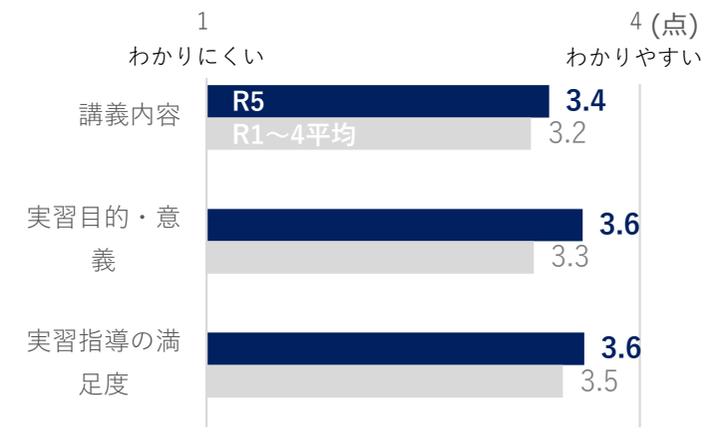
「講義内容理解」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.3点)に対してわずかに増加した。引き続き「どちらかといえばわかりやすい」と「わかりやすい」という肯定的な評価が得られていた。

「実習・演習の内容の理解」：

R5年度の平均値は**3.5**点と高く、R1~4年度の平均値(3.2点)に対し0.3点の増加がみられた。「わかりやすい」という肯定的な回答の割合が増加していた。

専門職学位課程



「講義の内容の理解」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.2点)に対して、肯定的回答が若干増加した。

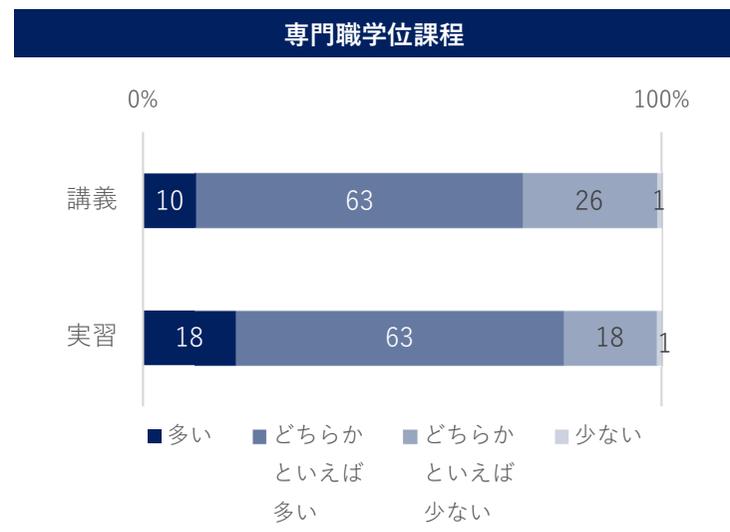
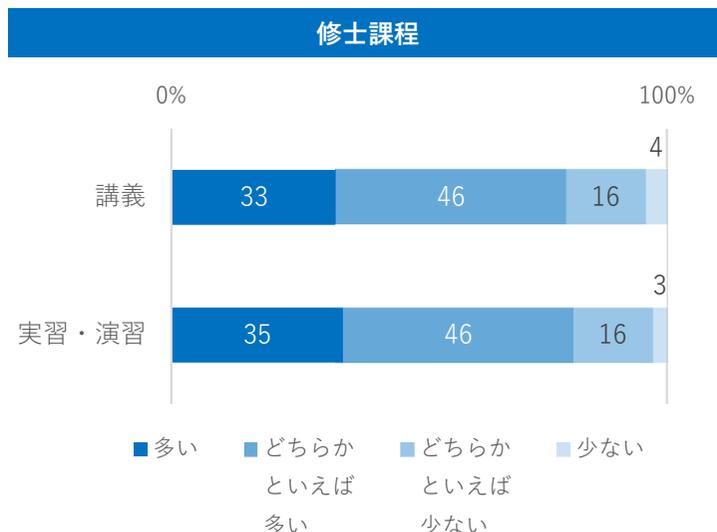
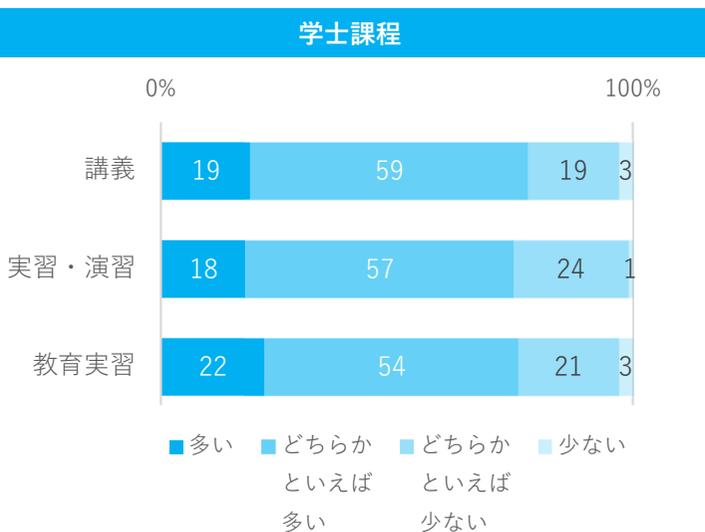
「実習の目的・意義の理解」：

R5年度の平均値は**3.6**点と高く、R1~4年度の平均値(3.3点)に対して0.3点の増加がみられた。

「実習指導の満足度」：

R5年度の平均値は**3.6**点であり、R1~4年度の平均値(3.5点)より微増し、高い水準で推移している。

必修とされる授業時間に対する認識に対し、4件法で回答を求めた。単純な得点化に向かない選択肢であるため、R5年度の回答のみを対象として構成比を示す。



「必修とされる講義の時間数」：

最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(59%)であり、「多い」(19%)とを合わせた回答割合は78%となった。必修とされる講義を多いととらえる学生の割合は高いといえる。

「必修とされている実習・演習の時間数」：

最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(57%)であり、「多い」(18%)とを合わせた回答割合は75%と多数を占めた。「どちらかといえば少ない」の割合は24%であり、講義より若干多かった。

「必修とされる教育実習の時間数」：

最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(54%)であり、「多い」(22%)を合わせた割合は、講義や実習・演習よりも若干多かった。「多い」「どちらかといえば多い」の合計割合は76%であった。

「必修講義の時間数」：

最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(46%)であるが、「多い」も33%と1/3を占めた。これらを合わせた回答は79%であった。「多い」(33%)の回答割合は、学士課程・専門職学位課程に比べて多くなっていた。

「必修とされる実習・演習の時間数」：

「多い」が35%に達し、「どちらかといえば多い」(46%)とを合わせた回答(81%)が多数を占めていた。学士課程・専門職学位課程に比べ、「多い」との回答が占める割合が多くなっていた。

修士課程での資格取得(例：公認心理師・臨床心理士)を目指す場合、どうしても必修講義や実習時間数が多くなるという事情があるため、学生の負担に対して注視することが必要だろう。

「必修とされる講義の時間数」：

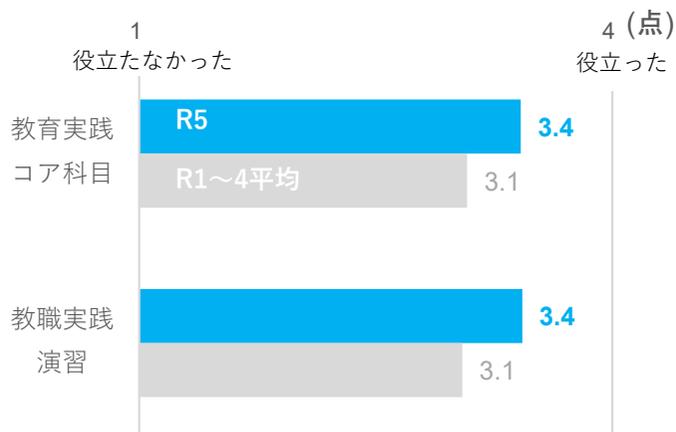
最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(63%)であり、「多い」(10%)と合わせると73%と高い割合を占めた。ただし、「どちらかといえば少ない」も26%を占めており、学士課程・修士課程と比べると、必修の講義が多いと捉えている学生の割合は少ない傾向がみられる。

「実習の時間数」：

最も高い割合を占めた回答は「どちらかといえば多い」(63%)であり、「多い」(18%)を合わせて81%となった。実習の量の多さを感じている学生の割合は高いといえる。

教職実践力に関する2科目に対して4件法で回答を求めた。
 「役立った」=4点、「どちらかといえば役立った」=3点、「どちらかといえば役立たなかった」=2点、「役立たなかった」=1点として平均値を算出した。

学士課程



修士課程

該当する設問なし

専門職学位課程

該当する設問なし

「教育実践コア科目は、教師として必要な実践的指導力を身につけるのに役立ちましたか」：

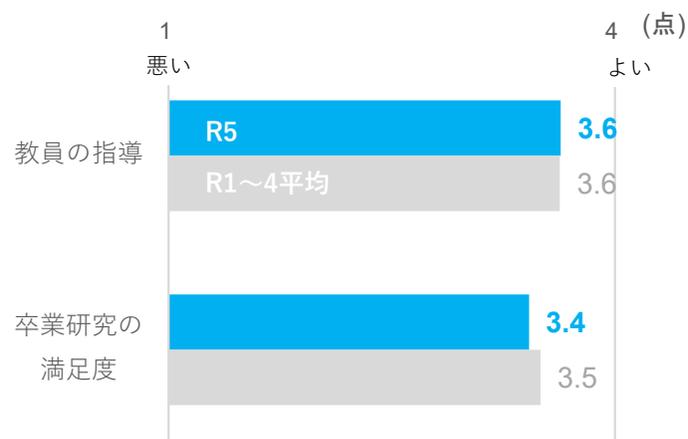
R5年度は**3.4**点となり、R1~4年度の平均値(3.1点)と比べて0.3点増加した。「役立った」と「どちらかといえば役立った」という肯定的な回答割合の増加がみられた。

「教職実践演習は教員として必要な資質・能力として有機的に統合・形成されるのに役立ちましたか」：

R5年度の結果は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.1点)と比べて、コア科目同様に0.3点増加した。「役立った」と「どちらかといえば役立った」という肯定的な回答割合の増加がみられた。

2項目に対して4件法での回答を求め、「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。

学士課程



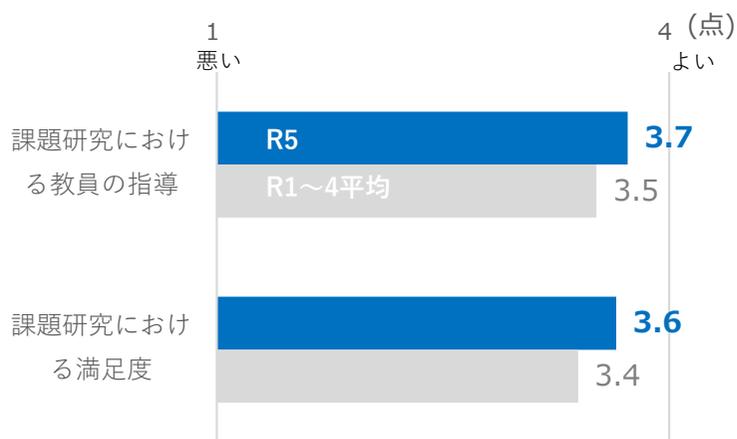
「卒業研究における教員の指導」：

R5年度は**3.6**点を示し、R1~4年度の平均値(3.6点)と同様に高い水準となった。「よい」と「どちらかといえばよい」という肯定的な回答割合が大半を占めており、なかでも「よい」の割合が最も多い状態を維持している。

「卒業研究における満足度」：

R5年度は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.5点)に比べて0.1点の減少となった。「よい」と「どちらかといえばよい」という肯定的な回答割合が多いが、横ばい微減傾向となった。

修士課程



「課題研究における教員の指導」：

R5年度は**3.7**点と高い値を示した。R1~4年度の平均値も3.5点と高かったが、さらに0.2点増加した。肯定的な回答割合が大半を占める状態を維持した上で、「よい」の割合が増加している。

「課題研究における満足度」：

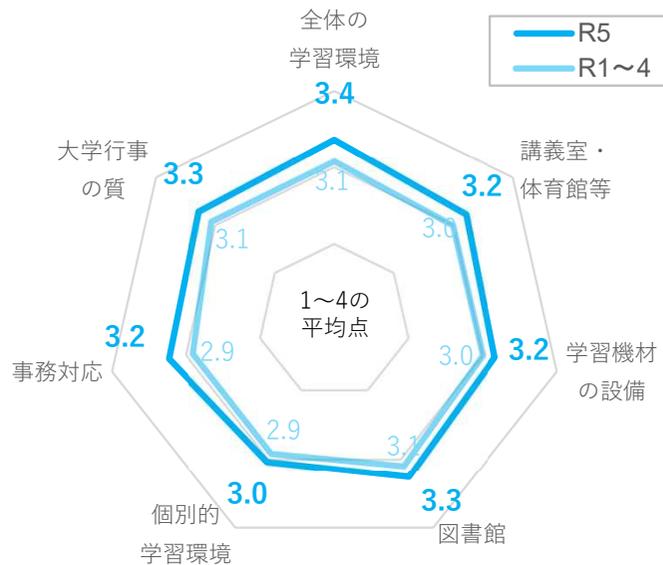
R5年度は**3.6**点となり、R1~4年度の平均値(3.4点)に対し0.2点増加した。引き続き「どちらかといえばよい」と「よい」という肯定的な評価が多くを占めていた。

専門職学位課程

該当する設問なし

7項目に4件法での回答を求めた。「高い」=4点、「どちらかといえば高い」=3点、「どちらかといえば低い」=2点、「低い」=1点として平均値を算出した。

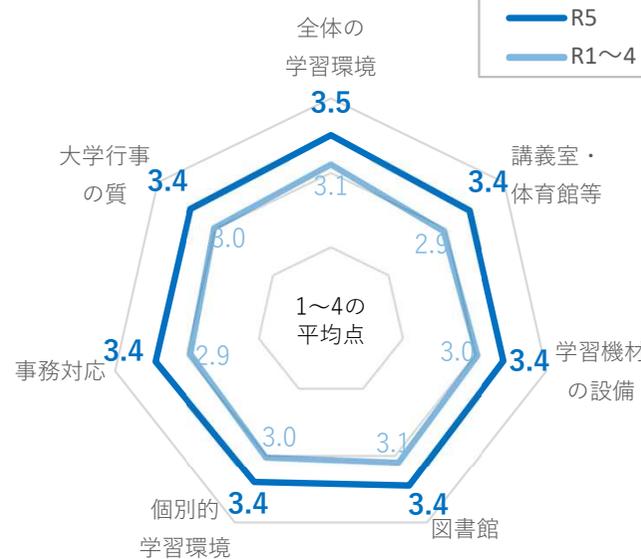
学士課程



R5年度は、「全体の学習環境」の平均値は**3.4**点、その他の6項目も平均値は3.0点以上となり、比較的肯定的な評価が多い結果となった。

また、すべての項目においてR1~4年度の点数を上回り、2点台の項目はなくなった。特に「事務対応」では0.3点の上昇が見られ、改善がなされたと言える。

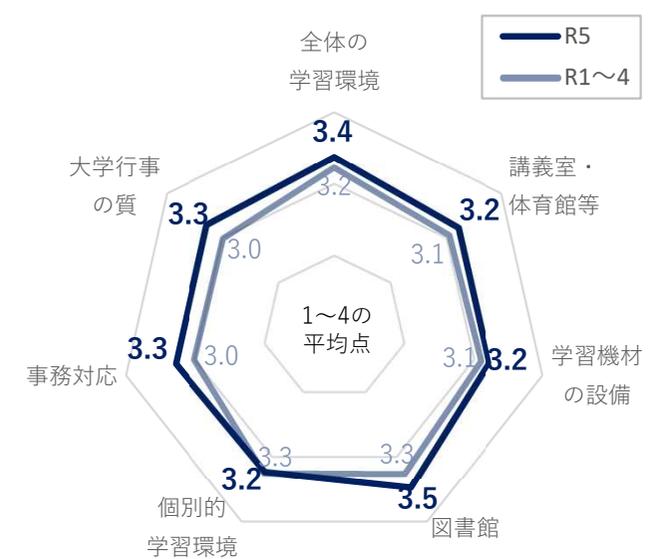
修士課程



R5年度の結果は「全体の学習環境」の平均値が**3.5**点、それぞれの項目でも平均値は全て3.4点以上であり、学生は教育環境を肯定的に評価している。最も高かったのが「全体の学習環境」(**3.5**点)であった。

また、いずれの項目もR1~4年度の平均を0.3~0.5点上回っていた。特に「講義室・体育館等」「事務対応」は、2点台だった平均値から大きく増加し、改善が見られる。

専門職学位課程

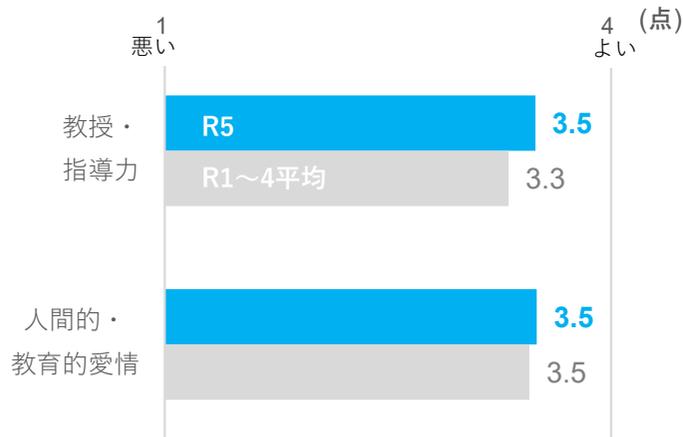


R5年度の結果は「全体の学習環境」の平均値が**3.4**点、それぞれの項目でも平均値は3.2点以上であり、学生は教育環境を肯定的に評価している。特に「図書館の質」の平均値は**3.5**点と高かった。

また、ほとんどの項目が例年を上回る結果であり、特に「事務対応」「大学行事の質」では、R1~4年度の平均値から0.3点の増加となり、改善が見られる。唯一、得点を下げたのが「個別的学習環境」(**3.2**点)であった。

2つの質問に4件法での回答を求めた。「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。

学士課程



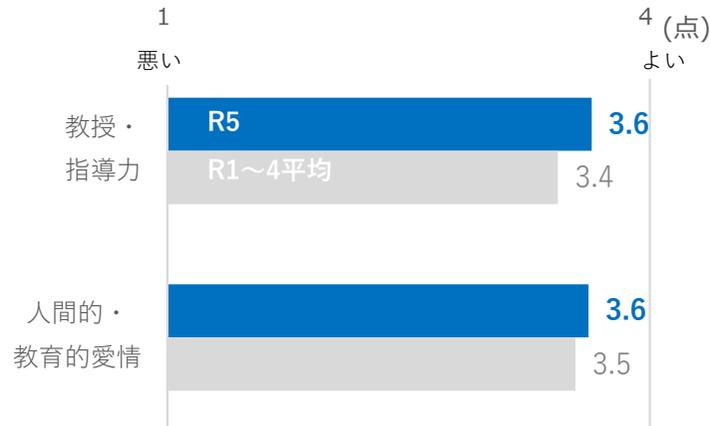
「大学教員の教授・指導力」：

R5年度の平均値は**3.5**点と高く、R1~4年度の3.3点を0.2点上回った。

「大学教員の人間的・教育的愛情」：

R5年度の平均値は**3.5**点と高く、R1~4年度と同様に高い水準を維持している。

修士課程



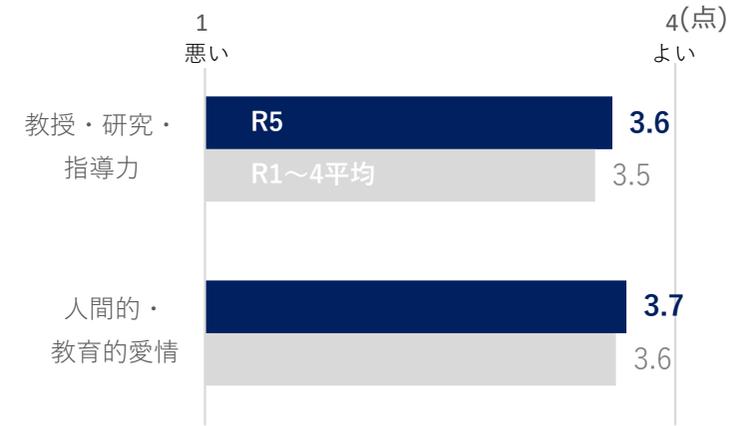
「大学教員の教授・指導力」：

R5年度の平均値は**3.6**点と高く、R1~4年度の平均値(3.4点)とくらべ0.2点高くなった。引き続き「どちらかといえばよい」と「よい」という肯定的な評価が多く得られていた。

「大学教員の人間的・教育的愛情」：

R5年度の平均値は**3.6**点と高かった。R1~4年度の平均値(3.5点)に対し、0.1点の微増しており、これまでに引き続き「どちらかといえばよい」と「よい」という肯定的な評価が多く得られていた。

専門職学位課程



「大学教員の教授・指導力」：

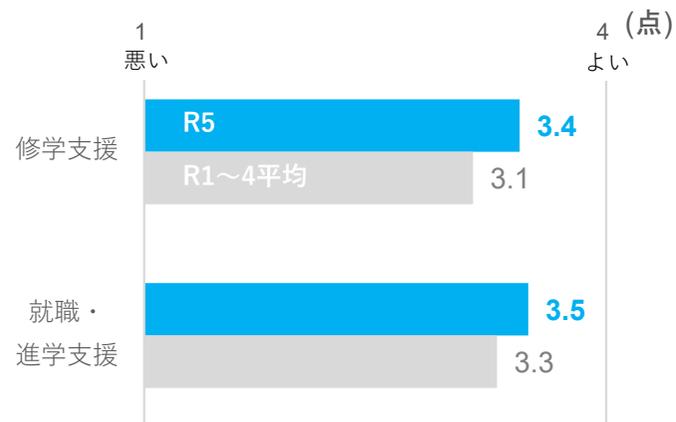
R5年度の平均値は**3.6**点であり、R1~4の平均値(3.5点)とほぼ同程度の高い水準を維持している。

「大学教員の人間的・教育的愛情」：

R5年度の平均値は**3.7**点と高く、R1~4の平均値(3.6点)とほぼ同程度の高い水準を維持している。

2つの質問に4件法での回答を求めた。「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。

学士課程



「修学支援」：

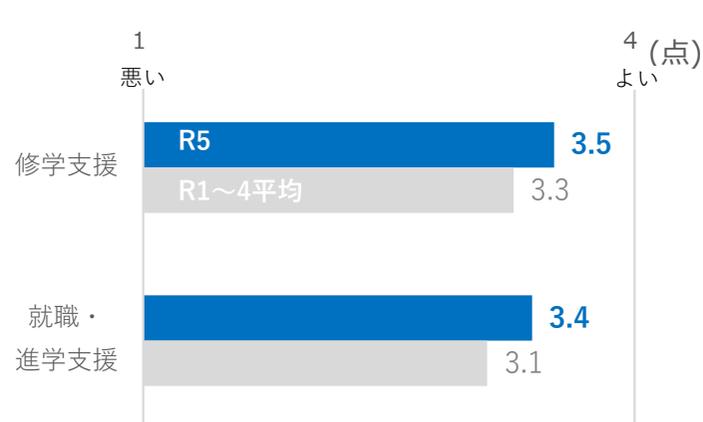
R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度(3.1点)より0.3点高かった。多くの学生から肯定的な評価が得られた。

「卒業後に向けた就職・進学支援」：

R5年度の平均値は**3.5**点であり、R1~4年度平均(3.3)点より0.2点高くなり、こちらも評価が高い。

2項目とも好評価を得られた上、R5年度はR1~4年度より点数が上昇している。本学による支援体制への満足度が高いことが伺える。

修士課程



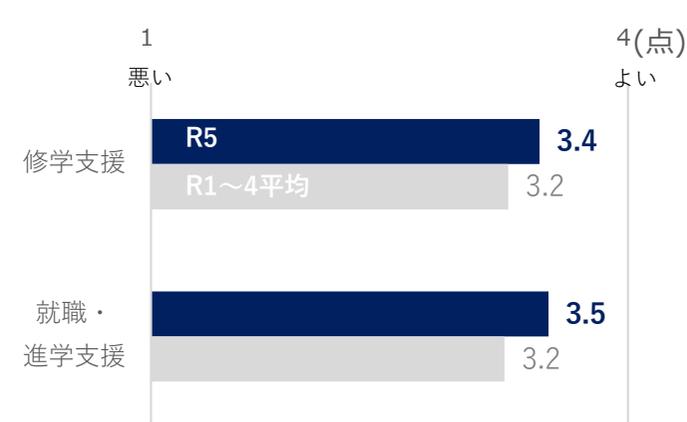
「修学支援」：

R5年度の平均値は**3.5**点と高く、R1~4年度の平均値(3.3点)より0.2点増している。引き続き多くの学生から「どちらかといえばよい」と「よい」という肯定的な評価が得られていた。

「卒業後に向けた就職・進学支援」：

R5年度の平均値は**3.4**点であり、R1~4年度の平均値(3.1点)より0.3点増加した。「どちらかといえば高い」と「高い」という肯定的な回答の割合の増加がみられた。

専門職学位課程



「就学支援」：

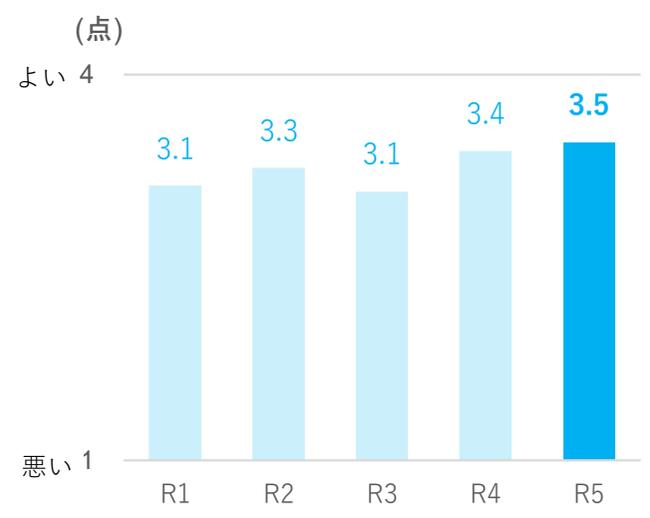
R5年度の平均値は**3.4**点であり、多くの学生から肯定的な評価を得られている。R1~4年度の平均値(3.2点)と比べ0.2点増加しており、評価は向上している。

「修了後に向けた就職・進学・復職支援」：

R5年度の平均値は**3.5**点と高かった。R1~4年度の平均値(3.2点)と比べて0.3点の増加がみられ、肯定的に評価する学生が増えている。

4件法で回答を求め、「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。
*この項目は、分析の総括で「総合満足度」として使用

学士課程



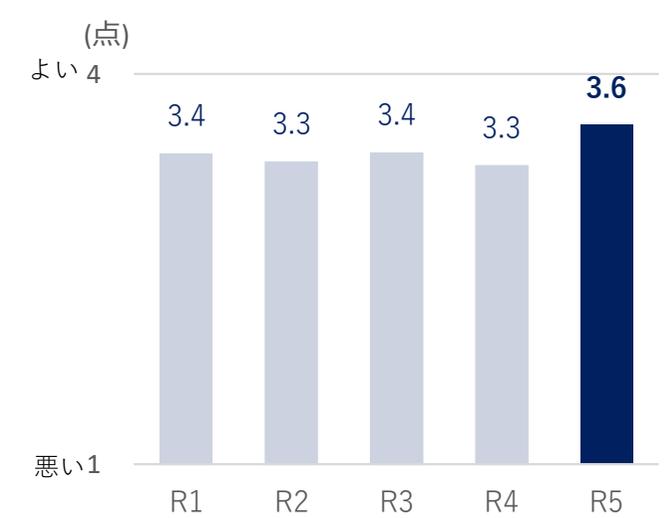
「教育内容の理解度」：
R5年度の平均点は**3.5**点と高く、ほとんどの学生が本学の教育内容を理解できたとらえていることが示された。R4年度も3.4点と高かったが、それを上回った。R1年度は3.1点、R2年度は3.3点、R3年度は3.1点と上下していたが、この2年間は上昇傾向が確認できる。

修士課程



「教育内容の理解度」：
R5年度の平均点は**3.5**点と高かった。R1~5年度までの5年間で上下しつつも平均値は常に3点以上となっており、一貫して「どちらかといえばわかりやすい」と「わかりやすい」という肯定的な評価が得られている。

専門職学位課程

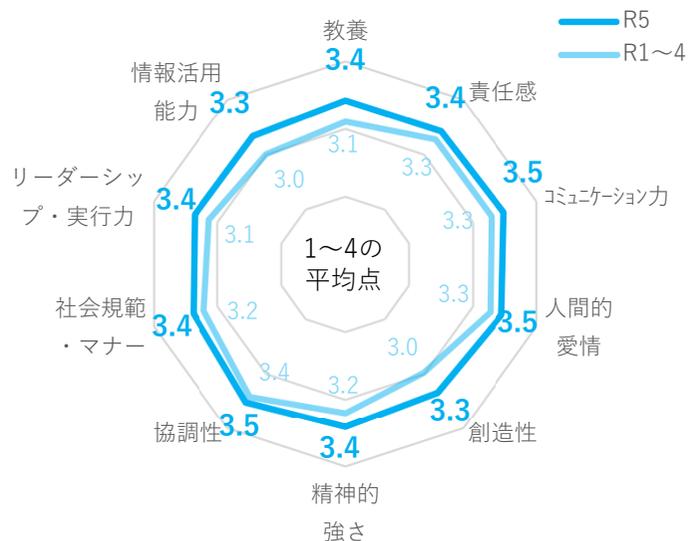


「教育内容の理解度」：
R5年度の平均値は**3.6**点と高く、直近4年の結果を上回った。直近4年の傾向も高水準ながら横ばいとなっていたが、R5年度は上昇したことが確認できる。

本学で学んだ成果として汎用的資質の修得に関する10項目を4件法での回答を求めた。

「身に付いた」=4点、「どちらかといえば身に付いた」=3点、「どちらかといえば身に付いていない」=2点、「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。

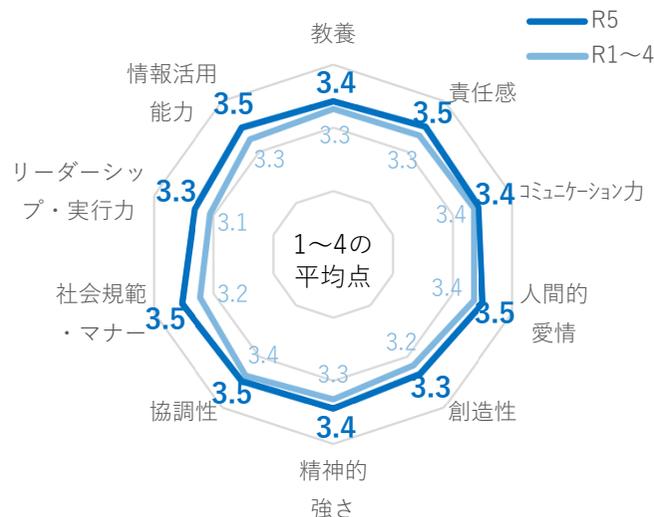
学士課程



いずれの項目でも平均点は3.3点以上で、学生はさまざまな汎用的資質が身に付いたと評価していることが分かる。特に「3.コミュニケーション能力・折衝能力」「4.他者に対する人間的愛情」「7.協調性」では平均点が3.5点と高い。

いずれの項目でもR1~4年度の平均を上回る結果であり、特に「情報活用能力」「教養」「創造性」は0.3点以上の増加がみられた。

修士課程



R5年度は全10項目において平均点は3.3点を超え、その中でも「強い責任感」「人間的愛情」「協調性」「社会規範・マナー」「情報活用能力」については3.5点となり、相対的に高い評価が得られていた。

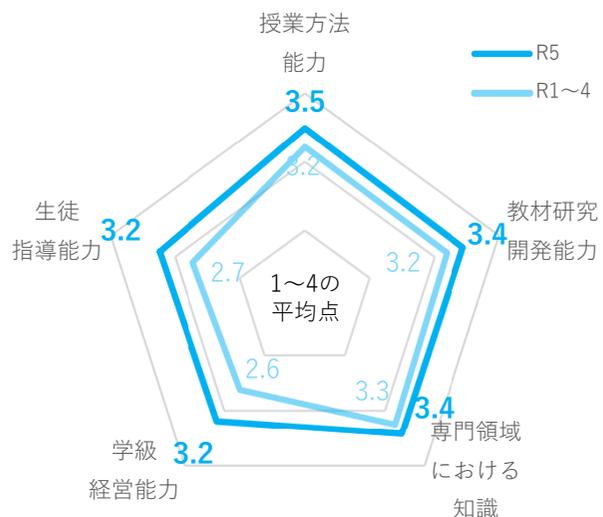
R1~4年度の平均点と比較して、R5年度では「コミュニケーション能力・折衝能力」(3.4点)は同等であったが、他の9項目では0.1~0.3点ほど上回っていた。特に「社会規範・マナー」は0.3点以上の増加がみられた。

専門職学位課程

該当する設問なし

本学で学んだ成果として教育的資質の修得に対して、学士・修士課程では5項目、専門職学位課程では2項目を4件法で回答を求めた。「身に付いた」=4点、「どちらかといえば身に付いた」=3点、「どちらかといえば身に付いていない」=2点、「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。

学士課程

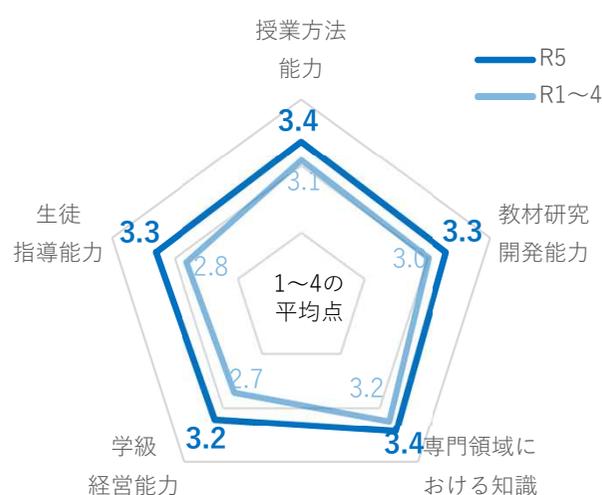


R5年度はどの項目でも平均点は3.2点以上と高く、例年を上回る結果であり、学生は教育資質が身に付いたと評価していることが分かる。特に、「1 授業方法能力」「2 教材研究開発能力」「3 専門領域における知識」においては平均点が3.4点以上であり、高い水準である。

一方「4 学級経営能力」「5 生徒指導力」においては過去4年間の平均と比べて大幅な上昇がみられるものの、平均点が3.2点と、前述の3項目と比べると低い水準にある。

学士課程の学びだけでは習得しにくい能力ではあるものの、学級経営や生徒指導について実践に役立つ基本的な見方・考え方を身につけられるようにする必要がある。

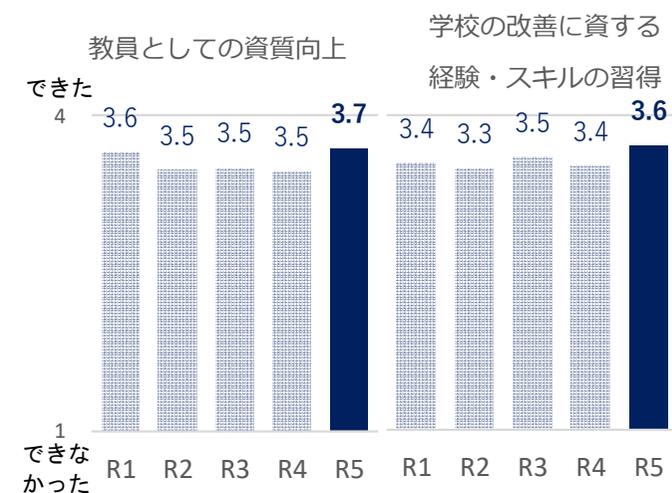
修士課程



R5年度は全5項目において回答の平均点は3.2点以上を示しており、R1~4年度の平均点と比較しても全ての項目で上昇がみられた。特に過去4年の平均が3点未満であった「学級経営能力」「生徒指導能力」についてはともに平均点が0.5点ほど上昇し3点台に達していた。

今年度も、各資質を一定程度修得できたと実感する学生が多いことが示唆される。

専門職学位課程



「教員としての資質向上」：R5年度の平均値は3.7点と相当に高く、前年度を含む直近4年の結果を上回った。また直近4年の傾向は高水準ながらも横ばいであったが、R5年度はさらに上昇したことが確認できる。

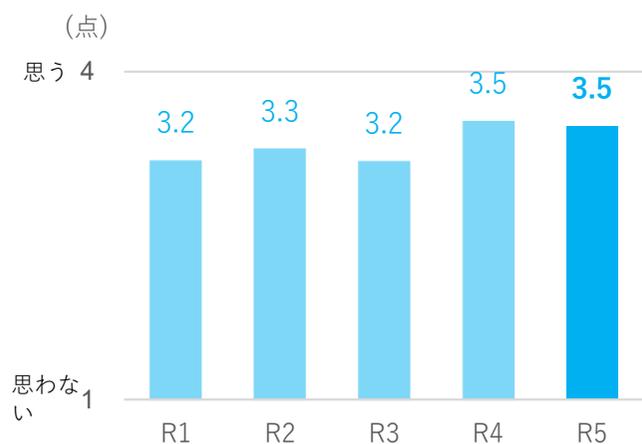
「学校の改善に資する経験・スキルの習得」：R5年度の平均値は3.6点と高く、前年度を含む直近4年の結果を上回った。一貫して高水準を維持している。

学士課程・修士課程：「社会に出て、本学の教育内容が役立つと思いますか」に対し、4件法で回答を求めた。「思う」=4点、「どちらかといえば思う」=3点、「どちらかといえば思わない」=2点、「思わない」=1点として各年の平均値を算出した。

専門職学位課程：「教育内容の満足度」に対し、4件法で回答を求めた。「満足できるものであった」=4点、「どちらかといえば満足できるものであった」=3点、「どちらかといえば満足できるものではなかった」=2点、「満足できるものではなかった」=1点として各年の平均値を算出した。

*この項目は、分析の総括で「総合満足度」として使用

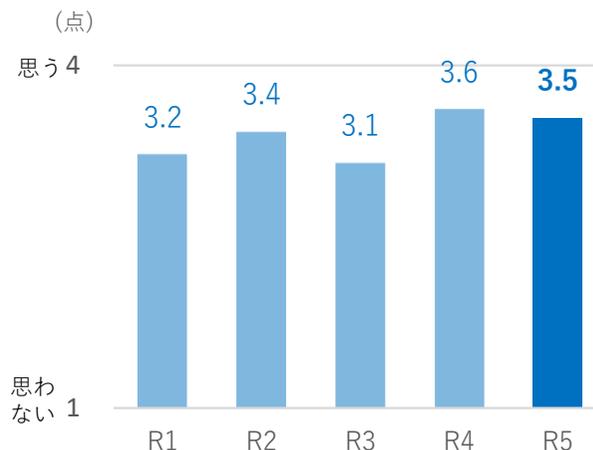
学士課程



「社会に出て本学の教育内容が役に立つか」：

R5年度の平均点は昨年と同様**3.5**点と高く(過去最高の結果)、ほとんどの学生が本学で学んだことに有用感を感じていることが分かる。R1年度は3.2点、R2年度は3.3点、R3年度は3.2点と上下していたが、この2年間は高い水準を維持していると言える。

修士課程



「社会に出て本学の教育内容が役に立つか」：

R5年度の結果は**3.5**点と高かったものの、R4年度と比べると0.1点の減少であった。R1年度以降の平均値は常に3点以上となっており、一貫して「思う」と「どちらかといえば思う」という肯定的な評価が得られている。

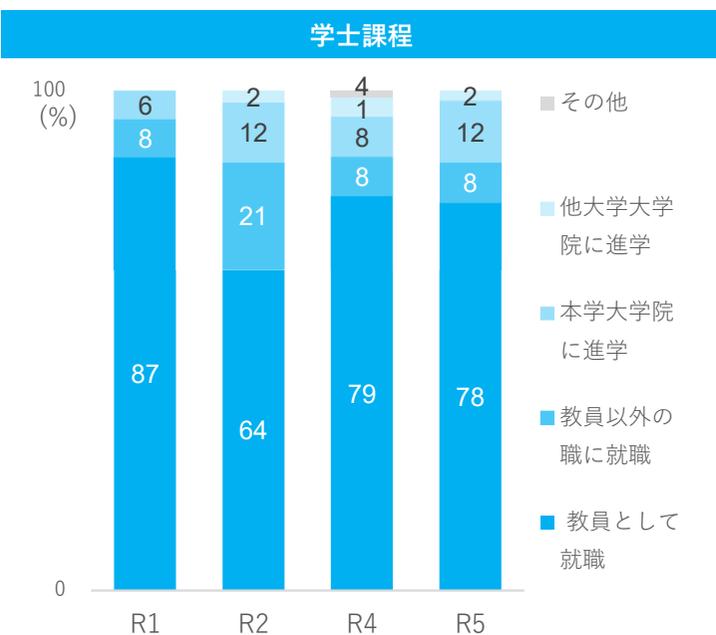
専門職学位課程



「教育内容の満足度」：

R5年度の平均値は**3.6**点と高く、はR4の平均値(3.3点)から0.3点増加しており、直近4年と比べて最も高い。また直近4年の傾向は高水準ながらやや下降気味であったが、R5年度では再度の上昇が確認できる。

卒業・修了後の進路を単一回答でたずね、各年の結果を構成比で示した(R3年度は回答数が少なく、特異な結果であったため掲載を省略している)。

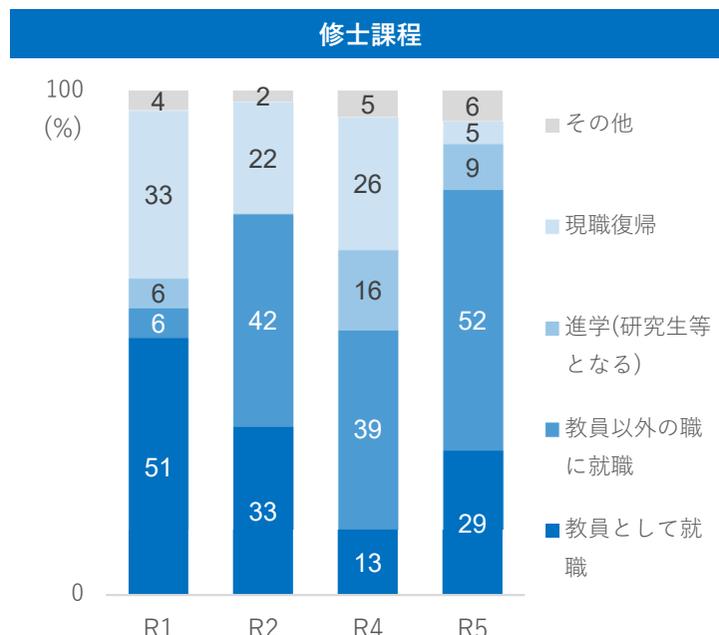


「教員として就職」78%：

昨年度(R4：79%)とほぼ変わらない結果であり、比較的高い水準を維持しているといえる。今後も個々の学生の進路選択の自由と多様性を尊重しつつも、教職への志を学生が持てるように教職の魅力伝えたり教育実践力を高めたりできような方策を検討し続けることが重要であると考えます。

「本学大学院への進学」12%：

昨年度(R4：8%)より増えており、本学で学士課程での学びをさらに深めたり、もっと教育実践力を高めたいと考える学生が増えていると考えられる。



R5年度は「教員以外の職に就職」(52%)が最も多く以下「教員として就職」(29%)、「進学」(9%)、「現職復帰」(5%)の順であった。

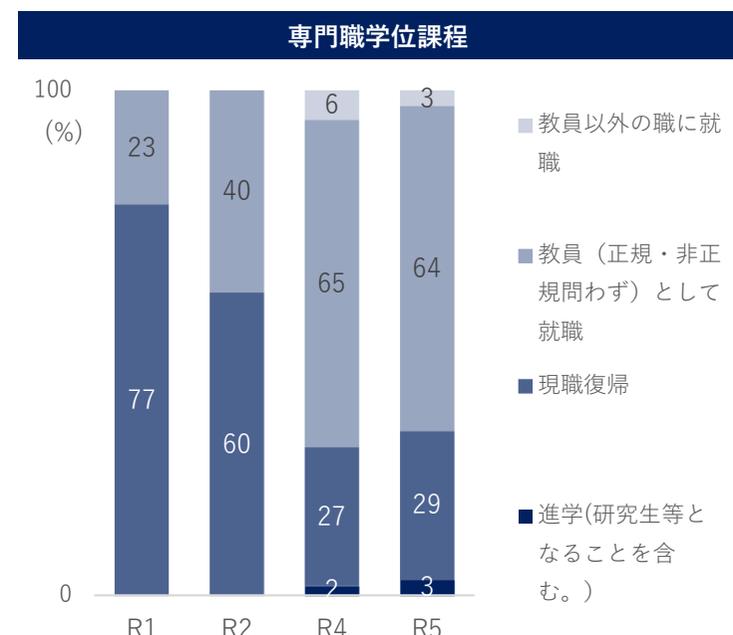
「教員以外の職に就職」：

R1年度(6%)は少数だったのがR2年度以降はほぼ40%以上急増している。

「教員として就職」：

R1年度(51%)は最も多かったのがR2年度(33%)、R3年度(13%)と急落したものが、R5年度(29%)は回復している。

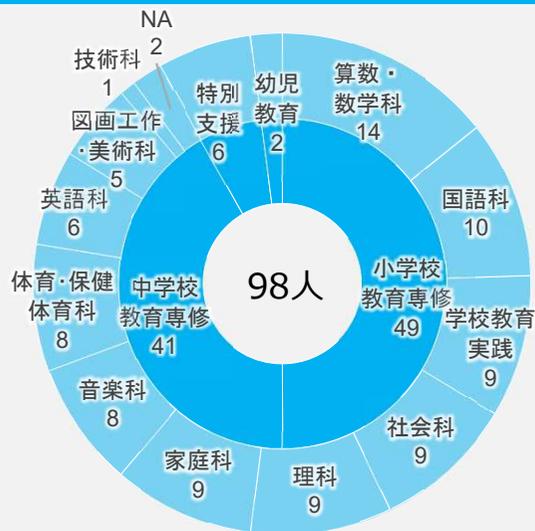
これらの変化は本学の修士課程がH31年4月より改組され、R2年度より本アンケートの回答者の大半が新課程を修了した学生となり、進路も教職だけでなく、臨床心理、学習科学、グローバル教育など様々な分野に多様化したことの反映だと思われる。



全般的にR5年度の結果は前年度の傾向と変わらない。教職系のみで構成されていたR1～R2に対し、教科系の修了者が対象になったR4以降では、傾向が異なる。

これまでのアンケートの回答の中心が現職教員であったのが、R4以降は学卒者が回答の中心となっていることを示しており、結果の分析において、留意すべきであろう。

学士課程



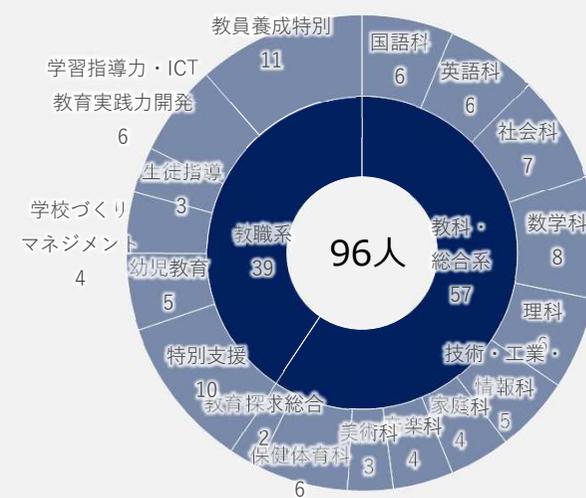
専修・コース	回答数	構成比(%)
幼児教育専修	2	2.0
小学校教育専修	49	50.0
中学校教育専修	41	41.8
学校教育実践コース	9	9.2
国語科教育コース	10	10.2
英語科教育コース	6	6.1
社会科教育コース	9	9.2
算数科教育コース	14	14.3
理科教育コース	9	9.2
音楽科教育コース	8	8.2
図画工作・美術科教育コース	5	5.1
体育・保健体育科教育コース	8	8.2
技術科教育コース	1	1.0
家庭科教育コース	9	9.2
無回答	2	2.0
特別支援教育専修	6	6.1
合計	98	100.0

修士課程



専修・コース	回答数	構成比(%)
長期履修生	10	14.3
長期履修生以外	60	85.7
心理臨床コース	35	50.0
現代教育課題総合コース	2	2.9
グローバル教育コース	32	45.7
無回答	1	1.4
合計	70	100.0

専門職学位課程



専修・コース	回答数	構成比(%)
教科・総合系	57	59.4
国語科教育コース	6	6.3
英語科教育コース	6	6.3
社会科教育コース	7	7.3
数学科教育コース	8	8.3
理科教育コース	6	6.3
技術・工業・情報科教育コース	5	5.2
家庭科教育コース	4	4.2
音楽科教育コース	4	4.2
美術科教育コース	3	3.1
保健体育科教育コース	6	6.3
教育探究総合コース	2	2.1
教職系	39	40.6
特別支援教育コース	10	10.4
幼児教育コース	5	5.2
学校づくりマネジメントコース	4	4.2
生徒指導コース	3	3.1
学習指導力・ICT教育実践力開発コース	6	6.3
教員養成特別コース	11	11.5
合計	96	100.0

回答者の所属は表のとおりである。回答者の少ないコースの結果は全体に与えるウェイトが低いため、大学全体の結果としての解釈の妥当性に若干の留意が必要である。